

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第88号

毎月発行

発行 2019年(令和元年)9月16日 月曜日

2019年(令和元年)9月16日 月曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営
コンサルタント、趣味は縄
文研究、今年1月に『東北先
史時代学』を提唱、東北から
日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



村崎野大乘神楽(岩手・北上市)を宮城・涌谷に招聘 舞台こけら落としに荒神・龍殿・権現舞を披露 かつて涌谷に存在した大乘神楽を想像し町民歓喜

今月七日、筆者が以前からひいきにしていた村崎野大乘神楽(岩手・北上市)を、筆者の故郷の宮城県涌谷町に招き、「荒神」、「龍殿」、「権現舞」の三演目を約一時間に亘り舞ってもらうことができた。



荒神

場所は、町で一番古い妙見社という神社で、その神楽舞台のこけら落としのメインとして、筆者が町と神楽をお引き合わせできたことに端を発し、この日を迎えることが出来た次第。そもそもなぜ、涌谷町に村崎野大乘神楽かという少し話は長くなる。



神楽団体責任者の中野氏

1689年(元禄2年)に当地に天照御祖神社を建立した妙法院が始めた、和賀山伏神楽が始まりと伝えられています。後に宮城県遠田郡涌谷の籠岳籠峯寺の修験者の影響を受け、1849年(嘉永2年)には、南笹間の万法院を会場



妙見社拜殿

ついているという話を大分前に耳にした。そのひとつがこの村崎野大乘神楽である。村崎野大乘神楽の由来については、神楽保存会HPに以下のような解説がある。

このように涌谷町との深い関りがある。会場にはたくさんの方々が集っただけでなく、町長はじめ、たくさんの議員、教育長、郷土文化研究者も集った。



日向地区祭り案内



龍殿



子供三人による権現舞前半



権現舞



権現様のお祓い



第61回

水産業再興のための 料理レシピ紹介

【サーモン カルパッチョ】

冷えた白ワインに
ぴったりですね!



郷土料理愛好家
松本由美子氏

『材料』 サーモン 100 g、サラダ野菜 20 g、塩 少々、オリーブオイル 大 1、レモン果汁 大 1、粒入りマスタード 大 1

『作り方』①サーモンに塩わさっとふりかけ サラダ野菜を敷いて、乗せます。
②オリーブオイル、レモン果汁、粒入りマスタードを合わせてかけます。

サーモンは青森産です。アボカドも使うとさらに美味しくなります。(松本談)



ワインは山梨産



世嬉の一の地ビール



肴は旬のホヤ



涌谷関係者と味見

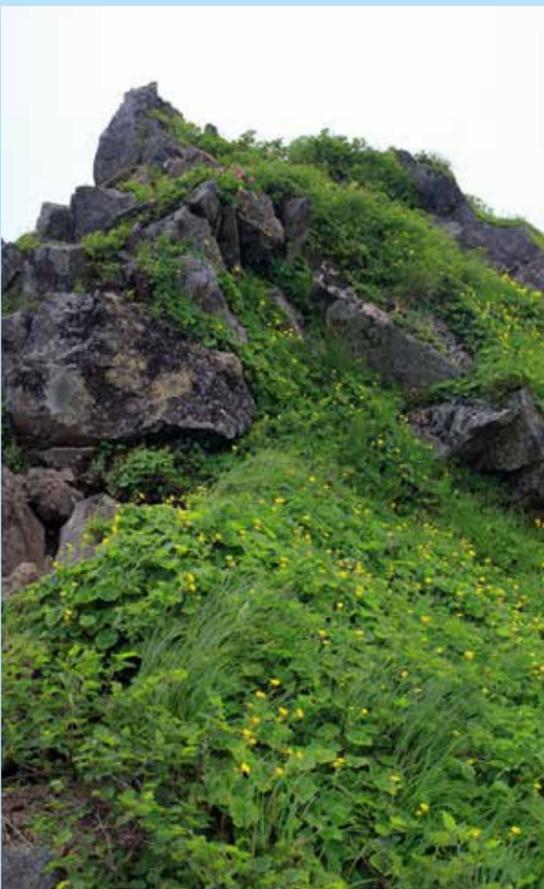
宮城県涌谷町の『みちのく GOLD浪漫』の日本遺産認 定を祝した地ビールとワイ ンを初プロデュース

今年春にも当新聞で取り上げましたが、郷里の宮城県涌谷町の『みちのく GOLD浪漫—黄金の国ジパング、産金のはじまりの地をめぐる—』の日本遺産認定を祝して、大分時間はかかりましたが、プロデュース中だったお祝いのワインと地ビールサンプルが揃い、涌谷町関係者と味見の会を催しました。ラベルはど素人ながらも筆者が考えました。プロデュースにあたってはたくさんの方々にお世話になりました。ありがとうございました。



写真でお伝えする **東北の風景**
夏との別れ

写真撮影 尾崎匠



パネルディスカッション で伝えてきたこと

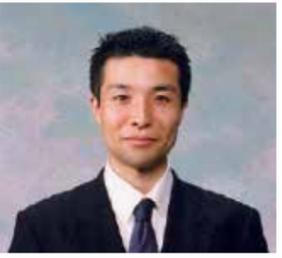
前号でも紹介した通り、八月二、三、四日に新潟市内で開催された「第二三回日本看護管理学会学術集会」のパネルディスカッション「大規模災害における看護管理者の役割」において、パネリストを務めさせていただいた。限られた時間ではあったが、私からは①東日本大震災の概要、②看護管理者の方々の伝言、③「経験知」は正しいか、④看護管理者の皆さんに伝えたいこと、の四点についてお話ししてきた。その内容について、備忘録の意味も含めて以下にそれぞれ紹介していきたいと思う。

東日本大震災の概要

東日本大震災を引き起こした東北地方太平洋沖地震は、世界の観測史上四番目に大きな規模の地震であった。これまでに観測された地震の中で最大の地震は日本にも大きな津波被害をもたらした一九六〇年のチリ地震で、そのマグニチュードは実にM九・五であった。東北地方太平洋沖地震のマグニチュードは九・〇である。九・五と九・〇ではそれほど違いがないように見えるが、マグニチュードは〇・一大きくなるごとに地震のエネルギーは約一・四倍になる。チリ地震は東北地方太平洋沖地震の一・四の五乗、すなわち約五十四倍ものエネルギーを持った地震ということになる。

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

看護管理者の方々の伝言

パネルディスカッションのテーマは「看護管理者の役割」であるが、私自身は看護管理者ではないので、お付き合いのある看護管理者の方々に、①震災体験を経てこの8年間、看護管理者として力を入れてきたことは何か、どんな思いを持っているか、②震災への備え、対応について全国の同じ看護管理者の方々に一番伝えたいことは何か、の二点についてお話を伺い、その概要について紹介した。その内容については、前号で紹介した通りである。震災において引き起こされた様々な事態に対応し、患者や職員の身を守り、地域の医療・看護を守り抜いてきた方々の言葉には、本当に説得力があった。私のお話した内容の中でも、ここが最も重要だったと考えている。

「経験知」は正しいか

震災における「経験知」が貴重なものであることは間違いないが、ただし、その「経験知」が普遍的なものかどうかについては十分な検証が必要ということだ。いくつかの「経験知」について、以前の連載でも検証した。今回は、①津波の前には引き潮がある、②仙台平野に津波は来ない、③

大きな地震の時には津波が来る、④三十八年に一度宮城県沖地震が起こる、⑤ハザードマップを頭に入れて行動する、⑥「津波でんでんこ」の六つについて取り上げた。①については、引き潮がなくても津波は来ること、②については、今回を例に引くまでもなく歴史上度々襲来していること、③については東日本大震災を上回る死者を出した一八九六年の明治三陸地震を例に、震度の小さい地震でも津波は起こり得る、ということをお伝えした。

④については、江戸時代からの記録を調べてみると、概ね二六年から四二年の間隔で地震が発生しているものの、中には前の地震の翌年や三年後に発生していることもあり、決して「三十八年に一度」ではないこと、にも関わらず、何となく「次に大きな地震がある」という感覚が被災地全体にあることについて、「災害は忘れた頃にやってくる」ではなく「災害は忘れる前にやってくる」かもしれない、ということをお伝えした。

⑤については、弟の事例を引きながら、仙台市の震災前の津波ハザードマップが震災による被害を受けて大きく改定されたことを紹介した。その上で、ハザードマップはある条件内で想定される被害予測であり、実際にはその条件を上回る災害が起こることもあること、従ってハザードマップはその時点でのもので、今後も改訂されていくものであることを指摘して、ハザードマップは参考にはしても、決して絶対のものと考えてはいけない、ということをお伝えした。

看護管理者の皆さんに伝えたいこと

私がこれまで経験したり、見聞したり、調べたりしたことの中で、看護管理者の皆さんにお伝えしたいこととして、①古文書・地域の伝承に耳を傾ける、②BCPから地域連携BCPへ、③自分の命を守ることを最優先に、④体験したことを伝え続けること、の四点をお伝えした。

①については、東日本大震災と同じ規模の大地震である西暦八六九年の「貞観地震」の記録が「日本三大実録」にあること、そしてその内容について紹介した。「海は、数十里乃至百里にわたって広々と広がり、どこが地面と海との境だったのか分からない有様であった。原や野や道路は、すべて蒼々とした海に覆われてしまった」という表記が、今回の仙台平野を襲った状況と全く同じであること、砂質堆積物の地質調査で貞観地震による浸水範囲と今回の地震の浸水範囲とがほぼ一致することなども紹介した。

また、仙台市若林区にある浪分神社に、江戸時代に仙台平野を襲った津波(慶長三陸地震津波)の際、この神社のある場所で波が分かれて引いた、との伝承があったものの、その伝承が被災前には地域に伝わっていないことが、今回の地震でも神社のすぐ近くまで津波が押し寄せたことを挙げて、どんな伝承も教訓も伝わらなければ意味がないことを強調した。

もう一例、岩手県宮古市姉吉地区にある「大津波記念碑」についても取り上げた。「高き住居は旧孫の和楽想へ惨禍の大津浪此処より下に家を建てるな」との記載のあるこの碑は一九三三年の昭和三陸沖地震の後に建てられた。姉吉地区は明治三陸沖地震の津波で壊滅したが、その教訓が伝えられず昭和三陸地震でも甚大な被害を出している。今回の東日本大震災でも、石碑より低い場所には大津波が押し寄せたが、教えを守った全一世帯の家屋は被害を免れており、悲劇は二度繰り返されたが、三度目は被害を最小限に食い止めたということをお伝えした。

「つなみてんでんこ」
各自でんでんばらばらに安全な場所に逃げる。
自分の命は自分で守る、という防災教育の言葉。

仙台市立芸術大学の事

仕事や街歩きからの帰り道、私は仙台の旧城下町北部、高級住宅地の上杉を通って郊外の丘陵地・台原に昇っていくのであるが、この上杉に現在三百平方メートルほどの巨大な更地が広がっている。もと旧制第二高、戦後に宮城高等女学校を経て長きに渡り東北大学農学部であった土地で、一昨年に敷地内の磐上・雨宮両神社を除く全ての建築が取り壊され、今後は巨大な商業施設や医療施設、マンションが建つ予定だという。



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

ここに全く別の大学『仙台市立芸術大学』が横たわり広がる光景である。聞いた事のある人はまずいないだろう。それもそのはず、私が空想上に作り出した架空の大学なのだ。しかし実は、私がここ仙台に移住して以来、この大学が存在しない事が、仙台いや東北の七不思議の一つのように思えてならなかったのである。

以前拙稿で紹介した、仙台北城下町の遺構・四ツ谷用水の復活案の舞台となつている場所でもある。私はこの広大な更地を横目を通り過ぎる時、いつもある妄想に取り付かれる。

を抱くかも知れない。芸術を学ぶ教育機関は確かに必要だが、それは「大学」である必要があるだろうか。厳然とした事実が一つある。関東以西には前述の三大都市は言うに及ばず、愛知県立芸術大学、金沢美術工芸大学、九州芸術工科大学(近年九州大学に統合)、沖縄県立芸術大学といった公立の芸大が各地方に存在し、これら(九州以外)は協定で結ばれている。

実は私は高校生の頃、映画製作を夢見て一時芸術系大学の映画学科を目指していた。結局、私立という事もあり美術や音楽の学科よりも数段高い学費を知って敢え無く断念したが、この時目指す土地は当然というべきか、迷わず東京であった。当時、映画を学べる大学は東京、大阪、京都に私立が各ほぼ一校ずつ。専門学校ですら関東以西にしかなく、東北以北の映画少年が東京を目指すのは必然過ぎる事であった。

つまり芸術大学を持つ事で、その地域は独自性を獲得し、その誇りの下に発展する事ができるのだ。何故、芸術大学にそれ程の力があるか? 専門学校ではなく大学とする事は、その地域の芸術に対する姿勢、芸術の社会的地位を示す意味を持ち、云わば人々の精神的な豊かさを地域外にもアピールできる、一つの重要な国力・地域力の証明でもあるのだ。

これは何を意味するのだろうか。もはや「芸術に大学は必要ない」など詭弁にしか聞こえない。これはれつきとした「北方格差」ではなかったのだろうか? 東北との対比で久々に引き合いに出すが、英国の「北方」に位置する所謂ケルト圏では、スコットランドのエディンバラとグラスゴウ、ウェールズのカーディフ、そして今は独立国のアイスランドのダブリン、全ての主要都市に芸術系大学が設置されている。この事と、これらの地域の独立精神や誇り高さは決して無関係ではない。沖縄にも公立の芸大がある事でもわかるように、芸術大学はその地方の誇りであり、アイデンティティの拠り所でもある。

た記憶は今も古びていない。ところで、山形の芸工大と秋田の「秋美」の建学理念には微妙な違いが感じられる。山形の芸工大にはまさに「東北の代表」として東北を背負い、各地から学生を集め山形市を東北芸術の拠点にしようという壮大な野心を感じる事ができる。一方の、秋田美大はあくまで秋田の活性化を標榜する。いかにも秋田らしいというか、他県とか、東北とかは二の次であり、とにかく地元・秋田が第一という意識が感じられる。もちろんそれはそれで、公立大学らしい現実主義、堅実さが感じられていいのだが、やはり東北にはどこかに途方もない理想を、歴史学者の故・高橋富雄氏が平泉藤原氏を指して言ったように「馬鹿真面目」に追究する姿が欲しい。それでいけば、開学に際して「縄文」とか「東北ルネサンス」とか恥ずかしげもなく(いや、多分恥ずかしいのだが思い切つて)掲げてしまふ芸工大の方に限りない愛嬌を感じてしまうのである。

「東北の地には、縄文時代から一万年を超える長きに渡り(中略)そこには渡来文化の影響を受け、生産性の合理化・効率化を支えられた弥生以前の、純然たる日本人としてのルーツ・源流を見ることが出来ます」二〇一三年には秋田公立美術工芸短期大学が東北第二の四年制芸術大学となる。当時の田中真紀子文科相が認可を取り消そうとした事で波紋を呼び、いかに東北の地に芸大が望まれているかを改めて浮き彫りにし

周知の通りこの東北最大といわれる都市には芸術系大学が存在しない。理由には、いくつか考えられるだろう。一つには、何といっても長年「地方の人々」の固定観念としてあった「芸術大学不要論」だ。山形の芸工大創立時にも「芸術では食べていけないだろう」「こんな田舎に芸大なんて作ってどうするんだ」と盛んに言われて苦しめられたという。逆に、決して山形市などに比べても田舎ではないはずの仙台市に芸術大学がない理由は、山形とは反照的なものだ。往年の山形は地方衰退の潮流の中で活力を失い、自らの魅力も見失いつつあるという大きな危機感に包まれており、その突破口として、芸術の潜在的な活力を見出したのだ。一方の仙台には、一見発展しているというその安心感から、芸術大学を建てるアイディアが出なかつたのではないだろうか。しかし、考えてみればこれは決して仙台にとって健全な状況ではない。というのも、仙台の発展というのは中央の東北管理など古くからの国策的な意思の結果であつて、決して仙台自身の力によるものではない。いわば仙台の持つ立地的利点が引き寄せた幸運と言ふべきものだ。その自覚があるか否か、仙台は次に隣県山形に建てられた東北芸工大から人材を引き寄せ、芸術的要素に

富んだ大都市への変貌を目論んでいるように見える。つまり仙台は尚も他地域の力を借りて(盗んで?) 発展しようというのであり、やはりこのままでは仙台に自ら何かを生み出すという風土が育つべくもないように思われてならない。山形の芸工大にしてみれば、複雑な心境かも知れない。山形の活性化、更には東北全体の芸術立国化を目指しているのであつて、決して仙台の発展が目標なのではない。考えようによつては、山形から仙台の芸術面をリードして動かし、芸工大の考える芸術立国を山形・仙台両面から実現していく、という道も考えられるかも知れないが。

を指すなら結局東京や海外に出て行く事になる。都市として繁栄してきたとはいえ、芸術的発展の拠点となるべき芸術都市として開発が視野に入れられてこなかつた仙台には、より高度で大掛かりな芸術を目指す人材の受け皿がない。真の芸術都市を標榜するならば、やはり自ら、内側から変革していく必要があるのではないだろうか。

しかし、筆者は敢えてここで仙台は自前の芸術大学を創立すべきだ、と考える。無論、東北を代表する芸術大学の創立については、仙台は完全に山形に先手を打たれた格好だ。おそらく現在に至つても仙台が芸大を持たないのも、既に隣県・隣都市にあるし、卒業生の多くは仙台に来て活躍するし、という事を考えてしまふからだろう。

現在、実際にこの街に息づき、既に活動を展開している芸術家は少なくない。私の長年行きつけの喫茶店・純喫茶『星港夜』には多くの音楽、美術、写真、詩歌や文学に関わる人々が夜な夜な集まる。大学出の人もいるが、多くは高等教育の権威とも溶けついても無縁な言ふならば「無頼」なる芸術家たちである。一方で『仙台芸術舎』などのアートスクールが講座やワークショップを展開して宮城・東北の芸術家や運営者を育成するという動きもある。同じような流れはやはり芸術大学の存在しない札幌市でも起こっているらしく、北日本には大学を

超越した独自の芸術的進化の潮流が生まれつつあるのかも知れない(いや、結局大学が欲しい、という渴望の表れなのだろうか)。考えてみれば、山形の芸工大も秋田の「秋田公立美術大学」も、時代の危機感と逆境の中で生まれた。あたかも東北の芸術のみが、他とは違う「反骨の証」だとも言うように。だとすれば、仙台市立芸術大学が実現するのは、この都市が真に逆境の中に立たされた時という事だろうか。山形や秋田の芸大を経てやってきた人材、大学に代わる実験的學校を展開する仕掛人、そして大学の権威など鼻で笑う無頼の芸術家。彼らが織り成す、まだまだ発展途上の芸術都市・仙台でこれから何が生み出されるのか。甚だ不肖ながら、私もここに参加して見届け



東北だからこそこの芸大、を強烈にアピールする芸工大(東北芸術工科大学HPより)

ここで、多くの人は疑問

た記憶は今も古びていない。

周知の通りこの東北最大といわれる都市には芸術系大学が存在しない。

を指すなら結局東京や海外に出て行く事になる。

超越した独自の芸術的進化の潮流が生まれつつあるのかも知れない(いや、結局大学が欲しい、という渴望の表れなのだろうか)。

考えてみれば、山形の芸工大も秋田の「秋田公立美術大学」も、時代の危機感と逆境の中で生まれた。



花火2



斜めの鳥居



花火

そうした心持ちになるのが白露という季節である。様々な色合いが鮮やかに変化する季節である。

そうした季節の交代を祝っての夏の花火がまたいい。華やかで味わい深く、心に深く突き刺さるはかなさがある。

また季節の交代だけでなく、世代の交代もある。

こうした情緒を楽しめるのも四季があるおかげ。

六十六歳にもなると余計にそう思う。季節の夏と人生の夏とを重ね合わせ、盛りとの別れがダブるのだ。

夏が終わりにかける頃はとてもさびしく感じる。

夏のギラギラした太陽の喧騒が突然消えていくのが感傷的な気分を引き起こす。

シリーズ 遠野の自然
「遠野の白露」
遠野 1000 景より



クロアゲハの産卵



後の祭り



湧水鹿踊



なごり



幼女剣士

【古代の鉄を探索する旅】③

中鉢美術館(宮城県有備館)再訪 東北古代鉄は北方ルート伝来

以前、当新聞の記事にも取り上げた、宮城県北西部の有備館地区にある日本刀専門の「中鉢美術館」に九月七日に再訪し、中鉢館長との楽しい懇談が実現した。筆者の次の映像作品の打

合せが主目的であったが、それだけでなく、もう一度東北の古代鉄の伝来ルートを再確認したかったのと、美術館内にあるパネルで日本刀のルーツを再確認したかったからである。

さらには、中鉢館長の日本刀及び東北古代鉄への情熱的な話を久しぶりに聞きたくなつたからでもある。打合せ中には、美術館を訪問する人が次から次へとひっきりなしに訪れ、館長

から直接話が聞きたいというので、話が何度も中断したほど人気の博物館になつてきた。最近では特に、海外からの熱心な日本刀ファンも訪れるという。

日本刀ルーツに関しては、結論から言えば、たいいてい人は驚くが、古代東北にルーツがある。大半の人は、日本刀は備前などがルーツだと思つている。しかし、古代日本に朝鮮

半島経由で伝わった「直刀」と日本刀は、最初から製造方法が異なり、まったく相容れない。つまり、湾曲した日本刀は直刀を曲げて造るのではなく、初めから湾曲しているのだ。

ということは、日本刀は朝鮮半島経由の伝来ではないのである。ではどこか。かつて日本刀鍛冶は東北にしか存在しなかつた。しかし、東北刀鍛冶は「俘囚」として全国

に強制移住させられたのである。全国の日本刀の産地の刀鍛冶はルーツをたどればみな東北刀鍛冶である。

また、東北古代鉄に関しては、最近の考古学会でもようやく古代東北鉄は朝鮮半島経由ではなく、もつと北側の大陸から伝来したという見方が広がってきた。中鉢館長の主張が、考古学会にも認められるようになったのである。まことに喜ばしいことである。



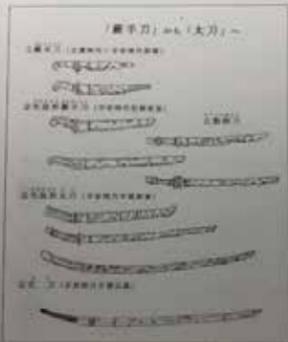
館長の美術館設立動機を思い出す



中鉢美術館



鉄の伝播ルート・・・北方ルート



日本刀の系譜



モンゴル刀

【北海道縄文を探索する旅】

恵庭の『カリンバ姫』との対面実現 縄文ファッションイメージを打ち破る

数年前になるが、恵庭のカリンバ遺跡(縄文遺跡)から発掘された複数の女性のアクセサリーの遺物を書籍で見ても驚いた。

地味な色と形の、いかにも原始人といった従来の縄文人のファッション感覚を一瞬で破壊するようなインパクトがあった。

真つ赤な櫛を多数頭に刺していた。(画像参照)鮮やかな赤である。そこで、恵庭のカリンバ遺跡からの出土物を直接見てみたいとかねがね思っていた。それが九月八日によく叶った。

発掘物は恵庭市郷土資料館に展示されている。そこを訪問する途中、トランプが生じて、予定日の訪問がむずかしい状況となつたが、どうしても見たい一心で、閉館時間に間に合うように途中駅からタクシーを飛ばし、何とか間に合った。

やはり、実物が最高である。写真では伝わらない迫力がある。発掘物は櫛やアクセサリーが主であり、それに合わせた衣服は再現されていない。きつとさぞや華やかな色彩が乱舞した衣服であつた。

これでは、人類が大陸から北海道に渡ってきたのはいまから二万五千年前ということであつたが、それを五千年も遡ることになる。この出会いで、さらに埋もれた古代史発掘の必要性を感じた訪問だつた。

定説では、人類が大陸から北海道に渡ってきたのはいまから二万五千年前ということであつたが、それを五千年も遡ることになる。この出会いで、さらに埋もれた古代史発掘の必要性を感じた訪問だつた。

一番の収穫は、北海道に三万年前の人類の痕跡があるという説明パネルの文章である。

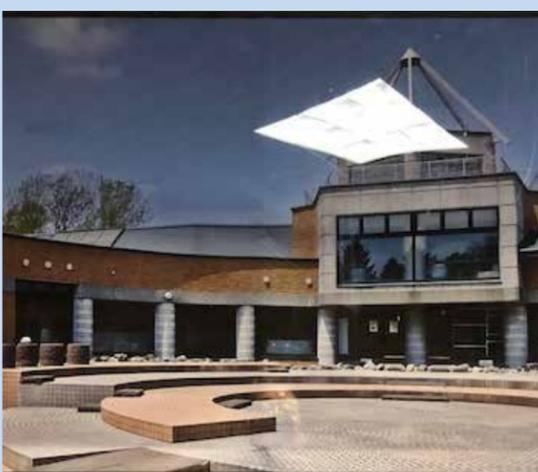
し時代が離れているが、いづれ発掘が進めば時代が遡るであろう。



【カリンバ姫たち】のファッション想像図



蕨手刀



恵庭市郷土資料館
EniwaCity Historical Museum



恵庭市郷土資料館

【アイヌ文化探求の旅】①

平取町二風谷アイヌ文化博物館 縄文とのつながりが見える



二風谷コタン案内板

アイヌ文化といえば、二風谷という地名はよく聞く。九月九日、千歳からレンタカーで平取町の二風谷コタンへ向かう。片道九十分。広い敷地に多くの「アイヌ住宅」が並んでいる。そこではアイヌ民芸表演が行われており、その人たちがいろいろな話をした。風変わりな旅人と思われたにちがいない。アイヌコタンに来たから

には、アイヌ文化の学習は当然だが、今回のツアーは縄文文化とアイヌ文化の関係を探索する旅でもある。そこで平取町から出土した縄文土器とアイヌ文化の関係を考えてみた。周辺から出土した土器の系譜から分かる通り、そこは確かに縄文文化が根付いていた場所であり、その後アイヌが継承したのである。筆者は常日頃から、アイヌ民族は現在の日本人同様に縄文人の末裔であり、共通の祖先を持つと考えているが、その祖先も軽視し、親戚同士のアイヌ文化も軽視し、自分たちとは無関係のものと考えてる傾向がまん延している。

いったいどこに祖先をこれほど粗末に扱う国民がいるのか、不思議でならない。最後に休館だった紗流川歴史館の入り口が工事中で裏側に回ったときに見えた景色が素晴らしい。かつてのアイヌ文化の自然崇拜思想が偲ばれるほどの景色だ。



出土土器



萱野茂 二風谷アイヌ資料館



平取町出土の土器の系譜



施設北側の風景



丸木舟(チブ)

【アイヌ文化探求の旅】②

阿寒アイヌコタン やはりアワとヒエの酒だ!



古式舞踊案内置

前日は千歳から釧路に移動し宿泊し、翌日の九月十日早朝に、レンタカーで阿寒アイヌコタンに向かった。途中カーナビは違った道を案内して道草を食ったが、何とか到着してすぐに古式舞踊を見学した。まず、最初に聞いた五人の女性が唄う歌に驚いた。二人と三人に分かれた輪唱

であると同時にそれぞれのチーム内でのハーモニーが非常にきれいで、全体ではいまままで聞いたことがないような合奏であった。次々に舞踊が披露されたが、ある舞踊の解説に「アワとヒエの酒」が出てきた。ずっとこのことを考え続けてきたので、何かのお引き合わせかと思ったほどだ。もうアワとヒエの酒復活はやるしかないと思った。また、この一帯は工芸店が立ち並んでいて、軒すつのでいたが、筆者の興味



外洋船

を惹かなかった。コロボツクルのみやげを買うついでに、アイヌ文化に関する書籍類はないかと聞いてみたがほとんどの店には置いていない。唯一置いていた店で、民話集、アイヌ語辞典を置いてあるだけ全部買収した。これらは、翌日の帰郷のあまりに長い乗車時間の間にすべて読み終えた。アイヌ文化の一端にほんの少し触れることが出来た。縄文文化とアイヌ文化の



アイヌ昔話やアイヌ語辞書類



古式舞踊を舞う女性たち

関係を探るといふ点での収穫は「船」である。アイヌの人々が日常、川や沼で使っていた船は、写真にあるような「丸木舟(チブ)」というが、民芸店街にある資料館で見つけたのが「外洋船」の写真だった。アイヌ民族は海洋民族でもあった。筆者は、縄文人も海洋民族だと考えているので、ここでつながった。四泊五日の実りある弾丸ツアーだった。